

風鈴は、うたるような夏の暑さをやわらげる澄んだ音を響かせます。

風鈴が鳴ったからといって、気温が下がるわけではありません。しかし、私たちが、風鈴の音を耳にしたとき、暑いと感じている心が変化し、涼しさを感じるのです。風鈴の音が、私たちの心を打ち、心を変えるのです。

風鈴は、無心に音を響かせます。いい音を聞かせてやろうとか、あの人だけに聞かせてあげたいといった余計な思いは、もちろんもっているはずはありません。だから、その音色は私たちの心を打つのかもかもしれません。

無心とは、「今・ここ」に専念^{せんねん}することです。さまざまな想いから離れ、この瞬間、この場所に、しっかりと存在することです。

私たちの生きる場所は、「今・ここ」にしかありません。しかし、私たちの心は、すぐにあちらこちらに飛び、なかなか安住してくれないのです。

古いお経の中に「一夜賢者の偈^{いちやけんじや げ}」という詩があります。

過ぎ去れるを 追うことなかれ。

いま 未だ来たらざるを ねがうことなかれ。

過去 それは すでに捨てられたり。

未来 それは 未だ来たらざるなり。

詩は、このような言葉からはじまります。

過ぎ去った過去のことを思い悩み、まだ来ない未来のことを憂^{うれ}えている私たちに、この詩は強く諭^{さと}すのです。

過去は、もうありません。未来もまだやってきません。私たちが生きているのは、この瞬間、この場所なのです、と。

もちろん、過去の経験を糧^{かて}にし、未来のために備^{そな}えるのは、私たちにとって必要なことです。しかし、それらが、必要以上に私たちを振り回し、「今・ここ」から引き離してしまうとしたら、それは本末転倒^{ほんまつてんとう}といえるでしょう。

「ただ、今日なすべきことを、熱心になせ」

「一夜賢者の偈」はこう結ばれています。

夏の日、無心に鳴る風鈴の音は、「今・ここ」に鳴る音です。
この瞬間、この場所で生まれる音です。あちこちに飛んでいってしまう私たちの心を、
「今・ここ」に立ち返らせてくれる、澄んだ音なのです。